

親指さん、有り難う



ジェイ・コスモ(株) 社長

おおしましゅうじ
大島修治

私の右手親指は元は右足の親指だった。つまり足から手に、親指に引越してもらったのだ。一九九六年夏、会社に押し入った暴漢にガソリンをかけられ、体の六割以上の大火傷を負った。医師からは、「まず助からないと思ってください」と宣告された。そんな私が今、奇跡的に助かって生かされている。会社は倒産寸前、体には後遺症が表れ、心は恨みつらみと劣等感で自暴自棄。三年以上の地獄のような闘病期間中は、会社と体と心の再建に向き合った。両親、妻、子供たち、医師、看護師、社員さん、友人たち、多くの方々のおかげで新しい命をもらえた。どんなに感謝しても足りない。

社会復帰までには一年以上かかった。出会った人から「元気になってよかったですね」と握手を求められる。しかし右手はいつもポケットの中にしまいこんでいた。親指、人差し指ともに完全に溶けてしまったからだ。せつかくの励ましの握手に応じられず、深い劣等感と申し訳なさを感じた。火傷後の私は、よい人間関係のないところに本当の幸せはないと感じていた。そんな自分が握手を求められても握手ができないなんて。親指さえあれば握手ができる。私のわがままで、右足の親指を右手に移植してもらった。

右足親指の欠損跡は冬は冷えてしびれる。そんなときは風呂に入って、「右足の親指さん有り難う。おかげで今日もいっぱい握手ができた。いい『出愛』をいただいたよ」と声をかけて、右手親指で摩る。不思議に痛みが和らぐ。施術後十二年が過ぎた。移植直後は、やはり足の親指だと一目瞭然。でも今は大きさも姿も左手の親指によく似てきた。夫婦も親子も会社の幹部も、そばにいるものは似た者同士になる。私は右手親指が大好きだ。右手に馴染み、しかも文句も言わずよく働いてくれている。おかげでパソコンもできるし、字も書ける。雑巾も絞れるようになった。何より握手ができるようになった。

私の人間関係作りは元気な挨拶と握手で始まる。今は「出愛」の第一歩が握手だ。会う人に握手を求める右手の親指さんに心から有り難うだ。いや、暗い靴底から明るいところ引越してきた右足の親指さん、有り難う。親指さんへの恩返しは握手を意識して広めること。毎年一万人以上との握手を目標にしている。